

若いお母さんたちへ

## 姉妹のかかわり

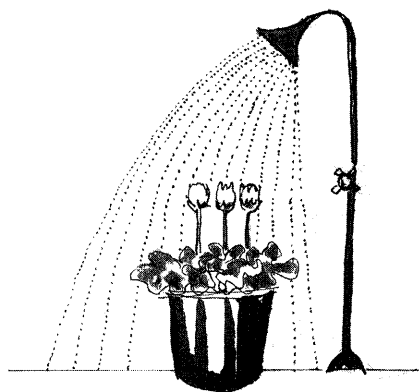
はるにれの会

### 榎田 二三子

子育て六年目。二人目の子どもが生まれて四年目を迎えています。仕事をしている頃、子どもが二人になると忙しさは二倍以上でしたが、それが今では夜中に起こされることも少なくなり、熱をだしたりすることも減り、子どもたちは大きくなってきたのだとつくづく思います。今回は、そんな二人の今までを見つめてみたいと思います。

〈妹の誕生〉

長女A（五才）と二女M（三才）は、ちょうど二才違いの姉妹です。お人形遊びが好きだったAにとってMの誕生は、まさに生きたお人形の誕生でした。話しかけたり抱いたり、泣き始めるととんで行ってあやしてくれました。時には、おしめを取り替えると言ってMをおしりまるだしにしておいてくれることもありました。よくかまってくれましたが心の中はおだやかでなく、物をなげたり、トイレトペーパーやティッシュをたくさんだしたり、私にしかられるようなことをしたりということも多



く見られました。母親である私がMを抱いている時は、（と言っても母乳をあげる時と、ひどく泣いている時以外は抱かず、Aと遊ぶようにしていました）Mをたいたりしないのですが、父親がMを抱いていると、たいたり、かみついたりすることもありました。けれども、しだいに落ち着き始め、三ヶ月程たつ頃には私からも離れとなりの家へ遊びに行くようになり、友だちとの遊びが楽しくなってきました。

Mが半年を過ぎ、だんだん存在感がでてくると、（今まで寝てばかりいた子が、起きている時間が長くなり、おすわりをして部屋のまん中にすわって遊んでいたりするわけですから）「まき、すこししかかわいくない。」と言い、自分のおもちゃは貸してあげなくなりました。これから半年近くは、Aのぜん息の発作もひどく、日常的な忙しさからくる私のイライラとAの気持ちのゆれがからみあい、親子三人こんがらがった毎日を過していました。

〈妹の行為を受けとめるA〉

Mが生まれてしばらくは、自分の赤ちゃんの時の写真を見て、「これは、まーちゃん。」と言っていたAが、自分が赤ちゃんであったことを受け入れ始めました。そうすると、今のMは、こういう時で、Aが赤ちゃんの時も同じだったと話すと、一応わかってくれるのでした。ちょうどMは、破いたり、とったりいうことをする時で、Aが作ったこいのぼりについている折り紙のうるこを取ってしまったり、絵本を破いてしまったということが多くありました。それでもAは怒ったりせず、「しかなかったからやりなおそう。」と言うのでした。Aには、Mの存在をまるごと受けとめる余裕が十分にありました。

ちょうどこの頃一才になったMは、A（三才）にとっても関心があり、Aとのかかわりが強くなってくるのでした。そんな時、Mのすることを見たとて受けとめることで、AとMの関係が変化していくことがありました。

寝起き——Aは昼寝の寝起きが悪く、いつもよく泣き

ます。この日は、少し早く起きたMを抱いていたらAが泣きました。Mをひざからおろし、Aを抱きます。気げんの悪いAは、Mにちよっかいをだしました。ここでMが泣くと、どうにもならなくなるのですが、Mは、けたけた笑ったのです。それを見て、Aも私も笑いだし、Aの泣き虫は終わったのでした。

見たて遊び——MがAの大切な人形を持って来ました。Aは袋に細々したものをに入れて遊んでいて気づかない様子。このままでAがMに気づくと、「あきの人形だめ。」と言って人形を取り上げ、どんとつき倒してしまふので、一足先に「ばあやが赤ちゃんつれてきましたよ。」と言うと、Aは「あっ、ありがとう。」と受け取り、Aの遊びは続きました。

ブロックで私と遊んでいる時など、Mは気になって近づいて来て、Aの作ったものに手をかけて、こわしてしまします。すかさず、「地震だ。」と言うと、Aも「地震だ。」と言ってこわしごっこになりました。

父親との遊びの楽しみは、お馬ごっこ。父親にAが乗

ると、Mがとことこ迫いかけます。Aは、「まきかいじゅうがきた。」と大騒ぎ。馬に乗って逃げまわります。Mもおもしろくて後を追いかけます。

AやMの行為を見たててしまうことで、そこに笑いが生まれ、遊びに変わっていききました。けれどもMの行動が豊かになり、受けとめきれなくなることもありました。

#### 〈だめの時期〉

砂山作り——前日ブランコに乗りたくて公園へ行ったのですが、混んでいて乗れず、あきらめて帰ってきました。A（三才三ヶ月）は不満でした。そこで、今日は思う存分ブランコに乗ることができ、公園の中を三人で散歩したあと、砂場でAが、「山をつくらうか。」と言いだしました。二人でせっせと作り始めました。M（一才二ヶ月）は拾ってきたコップに砂を入れ、こぼして遊んでいました。そのうちMは、Aが作っている山の砂を取り始めました。「まーちゃんやだ。」とA。「まきに負けなように頑張ろう。」と私。「がんばろう。」とA。三人

で競争し、一瞬わあーとなったところで、AがMの背中に砂を入れました。とっさにAをしかってしまいました。が、Aの遊びに入ってくるMを受けとめ、一緒にというのは、とても無理なことでした。

ままごと——M（一才三ヶ月）が食器棚の下からお皿をだし始めました。そのお皿をA（三才三ヶ月）が持って行き居間に並べ、「お弁当にしようかな。」と言っています。Mのおしめを替えているところへ、ごはんを作っているMが持ってきてくれます。寝ころがっているMがお皿を取ると、「まぎ、だめ。」ケーキの箱にブロックをつめてある間にAのお弁当箱をMが取ると、「まーちゃんだめ。」「まぎもお弁当がほしいんだって。」「だめ。」もうひとつ作ってあげれば。」と言いつつ、Mに作ってあげると、Mはにっこり笑います。Aはケーキの箱とお弁当箱を持っておもちゃの部屋へ行きました。Mも追いかけてます。その目の前でドアをしめられましたが、ざぶとんがはさまり、すぐには、しまりません。「あなた、行つてらっしゃい。」（私は、けつしてこのようなことを言わ

ないので、どこで覚えてきたのでしょうか。）とAに言われ、Mは私のところへ来ました。しばらくして、「あなた、おかえりなさい。」という声。Mに「ほら呼んでよ。」と言うと、Mはおもちゃの部屋へ入って行きした。「あたし、おかあさんなの。」とMをだっこして見せに來ます。

この時期のAは、友だちと一緒に遊んでいる時に、だめと言われることの多い日々でした。そしてMに対してだめと言う日々でした。Aが充実しきれない日が多く続きました。

〈友だちと楽しい時を過す〉

三才四ヶ月の春から一年間は、Aと私にとってそれは楽しい時でした。と言いますのは、同じマンション内に親子共気の合う友だちができたからです。毎日のように行き來をし、朝から晩まで楽しく遊んでいるのです。家にいれば、AはMにじゃまされると思うことも多く、その不満を友だちの家で思う存分楽しいことやいた

ずらをするので充たしてくる様でした。Mはといえ  
ば、Aと一緒にいきたいのですが、途中で泣きだすので  
置いていかれ、母とのんびり遊んでいました。

四月からAと友だちは、同じ幼稚園へ一緒にかようこ  
とになり、親子共々楽しみにしていたのですが、我家は  
新潟転勤になってしまいました。

### 〈大きくなったM〉

新潟に来てすぐは、Aにとって親しく遊べる友だちは  
Mであり、母でした。異った環境にぼんと入ったAとM  
は、姉妹というつながりで、しっかり向きあったのでし  
た。そして、しゃべることが苦手であったMが、しゃべ  
ることに関して大きく伸びたのが、新潟に来てから、二  
才四ヶ月過ぎでした。

Aとも話を通じる様になり、二人がおしゃべりをしな  
がら遊んでいることがよく見られる様になりました。ま  
た夕食時や夜寝る前などは、二人が同時に話し始めた  
り、割り込んで話し始めたりするので、たいへんです。

首を左右に向け、二人の話を同時に聞いたり、「ちよつ  
と待ってて、こっちの話が先だから。」と交通整理をし  
たりしています。

二人の生活時間帯もほとんど同じになりました。朝起  
きてから二人でしばらく遊んだあと、Aを保育園へ送っ  
て行きます。Mは午前中を友だちと遊んで過し、午後は  
昼寝。Aが帰ってくる頃に起きます。そして夕方まで友  
だちと遊んで過します。Aが保育園へ行くようになり、  
Mと私だけの時間はあるのですが、Aと二人だけの時間  
が、ほとんどなくなってしまいました。秋から冬にか  
け、牧場へ散歩、そり遊びとMと友だちと私が楽しく過  
している、「まーちゃんはいいな。」ということばが、  
Aの口から出てくる様になりました。

### 〈へっつかかる二人〉

五才と三才になった冬。けんかと言うより、ささいな  
ことでへっつかかることが多くなりました。

夜寝る前に読む本を選びに行った二人。Mが選んだ本

に、「へんなの。そんな本……。」とAが悪口を言います。Mも「お姉ちゃんのだってへんなの。」と言いつ返しますが、おしゃべりAの悪口には言い返しきれず、MがAをたたきます。たたかれるとAが泣き、今度はMをけとばします。そうなれば、力の差は歴然。Mが大泣きに泣き、泣きながらふとんへ入るといふ日が何日も続きました。翌朝になれば仲よくなるかと思うと、そうはいかず、朝、顔を会わせたところからまたつかかる二人でした。二人いれば、けんかは日常茶飯事です、この時

の二人は、とげとげになった二人の気持ちがひっかかっている様でした。

〈お母さんと遊びたいA〉

寒い二月、お母さんと遊びたいと言ってAは、保育園を休んだり出たりしていました。新潟への転勤後、初めての保育園で、本当にエネルギーに友だちの家を渡り歩き、遊んでいたAでした。そのことを思うとうその様に家にとじこもり、時々友だちが来ることはあつて



も、自分から友だちの家へは、けっして行きませんでした。家にいるからといって、特別に遊ぶわけではなく、Mと二人で遊んだり買い物につきあったりしていました。けれども、よく考えてみれば、Aの生活は保育園と友だちと遊ぶことが大部分を占めていたのです。家で過ごすうち、いつの間にか、あのつかかかっていた二人は消え、仲よく遊ぶようになっていました。

〈Mをおんぶする〉

秋に友人宅を訪ねた時、集まった子どもたち七人のうち大きい二人が小さい子どもたちをおんぶし、世界一周と称し部屋から部屋へぐるっと回ってくれる遊びをしていました。そこから帰宅後、我家ではAがMをおんぶし、家中を歩き回っていました。このおんぶということは、この時期の二人の関係を考えてみますと、とてもおもしろいことです。食事、排泄、睡眠、着がえといった生活面では、AとMの差が縮まり、同等になってきています。けれども、おんぶに関しては、AはMをおんぶで

きますが、MはAを絶対におんぶできません。ことあるごとにAはMにおんぶしてあげようと言い、Mは喜んでしてもらうのです。そして今では、「そんなことしたら、おんぶしてあげないからね。」とAは言い、Mは帰宅後、遊びにとび出して行くAに、「帰ってきたらおんぶしてね。」と言うのです。おんぶに関しては、姉と妹という上下関係が保たれているわけです。

〈Aができることに挑戦するM〉

水不足が騒がれている初夏のある日、Mと私は、友だち親子と公園へ出かけました。その途中で、Mは「今日は、お姉ちゃんが作ってるみたいなお山つくるの。」というのでした。というのは、前回Mとその友だちと公園で遊んだ時、砂山を作り、三人でトンネルをほりうまく完成したのです。以前は、トンネルをほっているうちに山がなくなってしまうか、私ひとり頑張っ作っているかのどちらかでしたのに、今回は、すごく上手になっていたのです。それを家に帰ってAに話し、とてもうれし

く思っていたのでした。公園へつくと砂場へ直行。ぞうきんバケツでどんどん水を運び、(給水制限の行われている首都圏には申しわけない話ですが、)仲よし三人組が並んで自分の山をひとつずつ作りました。Mは大きくなった山をほり始めました。何げなく反対側からほり始めた私に対し、シャベルを投げつけ、ひとりでやりたかったのにとMは怒りました。もう一度山を作りやり直しました。私は手も口もださず離れています。黙々とほるM。けれども悲しいかな、トンネルはくずれてしまいました。遠くから私の方を見てわーと泣いているM。気の短かいMは、うまうまいかなと怒ることが多いのですが、この時は怒ってはいなくて、くずれてしまったことが、とにかく悲しくて泣いている様でした。もう一度頑張ることになりました。今度はMと相談し、私も一緒にほることになりました。やっと完成。トンネルに水を流し満足するMでした。

今Mは、Aがやっているなわとびや登り棒に、できないながら挑戦しています。きつとトンネル作りもまた挑

戦することでしょう。

〈そして、これから〉

四年前には、一人は寝たきり、一人は自由に歩きしゃべっていました。それがひとつずつ同じにできるようになり、今では、取っ組み合いのけんかをします。これからは、好きなこと、得手、下得手、性格の違いもお互いに関わり、葛藤も生じてくることでしょう。今までは想像もつかないいろいろなできごとが、これから先あることと思いますが、心配ごとは、さておいて、二十年后に素敵な女友だちになっていることを期待し、その仲間にも入れてくれないかななどと、勝手なことを思いめぐらす今日この頃です。